

[7] フィリピの信徒への手紙 1 章 15 節－20 節
「キリストがあがめられるように」

《1》

パウロは、キリストが宣べ伝えられるのであれば、それが愛の動機によるものであろうが、パウロに対する悪意によるものであろうが、喜ぶ、と告げています。

とにかく伝道がなされ、主イエス・キリストの福音が告げ知らされているのであれば、そのことで喜ぶ、というのです。パウロの個人的な事情としては、現在獄中にあります。しかし、そのことの不平不満をかこつのではなく、主イエス・キリストが宣べ伝えられていることを喜ぶ。

そして、そのことを、これからも喜ぶと告げます。今朝の個所では、なぜそのように喜ぶのか、喜ぶことができるのか、という理由が語られていると言ってよいでしょう。

「このことが私の救いとなる」と知っているからです、とあります。

まず「このこと」とは何を指しているのか、ということになるでしょうが、これは 15 節以下の、“ともかくキリストが宣べ伝えられている”、という事実を指していると考えられます。

そして、そのことが私の救いとなる。「救い」と訳されているギリシア語の言葉は、日本語の救いよりももう少し広い意味があつて、「安全」とか「健康」といった意味もあります。

それで、中には、この救いということについて、安全や健康といったような意味も加味してでしょうか、パウロはここで、牢獄から解放・釈放されることを意味しているのではないかという考え方もあります。

しかし、これは全体の文脈などから言って（例えば、パウロは死を覚悟しているように見えます）、違うでしょう。「救い」は、永遠の命に生かされる救い、罪を赦され神の国の一員とされる救いです。信仰の問題としての救いです。

すると、「このことが救いになる」というのを、どのように考えたらよいのか、ということにもなるでしょう。

と言うのは、救いは、信じたその時に与えられるものです。パウロもちろん、そういう意味で救われています。それなのに、重ねて、このことが救いとなる、というのはどういう意味なのか？

それは、人は一旦救われて、それですべてのことが解決して、あとは気儘に生きていけばそれでよい、ということではないですね。信仰の生活というのは、地上の生涯が続く限り、続きます。

その地上の歩みにおいて、私たちは救いの完成を目指すのです。よく、洗礼は信仰生活の始まりである、ということを行います。全くその通りで、信仰をトラック競技に喩えるなら、洗礼というのはようやくスタートラインに着くことができた、ということです。

そのまま立ち上がらなかつたり、走っても脇道にそれてしまつたりしては、信仰を

全うしたとはとても言えませんね。目標を目指して、熱心にひた走る。それは主イエス・キリストをいよいよ深く愛し、主とのつながりをさらに確かなものとし、喜んで生きることです。また、いっそう聖い者とされていくこと。勇敢に、希望をもって生きる者となることです。

そのようにして、信仰が確かなものとされ、救いが完成される。そのことへと、生涯ずっと向かって行く。これが、ここで「私の救いとなる」ということです。

《2》

そして、そのように救いとなるのは、二つのことを通してであると、ここでパウロは言っています。

あなたがたの祈りと、イエス・キリストの霊の助けとの二つです。

ここを整理しますと、「このこと」という主イエス・キリストが宣べ伝えられていることが、あなたがたの祈りとイエス・キリストの霊の助けとを通して、私をいよいよ救いの完成へと向かわせている、となります。

では、キリストが宣べ伝えられている事実が、なぜパウロの信仰をいっそう堅固なものとし、救いを確かにするのか。彼に勇気と希望を与えるのか。彼をますます神さまに近い者とし、聖い者とするのか。

それは、キリストが宣べ伝えられることによって、多くの人たちが主を信じ、死から命へ、闇から光へと移され、すっかり新しい命に、喜んで生きている。そのことを見ているからです。

獄中ですから、直接見ることはできないにせよ、伝え聞いて、喜んで励まされている。そのようにして、主の救いの確かさ、神の恵みの揺るぎなさを改めて確信して、パウロもさらに信仰の熱心に励むのです。

そして、そこには、あなたがたの祈りと、イエス・キリストの霊の助けとがある。この二つは、およそ信仰的な事柄であれば、何かが成し遂げられるためには必要な二つのことである、と言えるでしょう。

まず、あなたがたの祈り、つまり執り成しの祈りです。パウロは折に触れ、自分のために祈ってほしいと願っています。

例えばテサロニケの信徒への手紙一。パウロはテサロニケ教会の兄弟たちのために祈った後、5章25節で、「兄弟たち、私たちのためにも祈ってください」と述べています。

また、コリントの信徒への手紙二1章11節では、「あなたがたも祈りで援助してください」と願っています。

さらにローマの信徒への手紙15章30節では、一緒に祈ってくださいと言っています。「兄弟たち、私たちの主イエス・キリストによって、また霊が与えてくださる愛によってお願いします。どうか私のために、私と一緒に神に熱心に祈ってください」。

パウロが執り成しの祈りを願うのは、言うまでもなく人々の祈りによって励ましを受けたいということがあるわけです。しかし、それは彼らの祈りを直接聞くことによって、その祈りの言葉で励ましを受けたいということに、必ずしもすべてがかかって

いるわけではないですね。

一般論としても、少なからず、そういうことは言えるでしょう。勿論、直接執り成しの言葉を聞くことができれば、それに越したことはありません。しかし、パウロは今、獄中にあります。それができない状況です。

しかし、それは何ら支障とはならない。執り成しの祈りによって、力を受け、励ましを受けることができる。それは、祈りには力があるからです。パウロのための執り成しの祈りを、神さまが必ず聞き上げてくださるからです。

それで執り成しの祈りには力があり、励ましと慰めがあります。神さまが答えてくださり、すべてを最善となるように、導き、助けてくださいます。誰それさんのために祈っています、といったことを、必ずしも当人などに口にする必要はないかもしれません。

それでも、祈りは聞かれていますから、その人のために、神さまは最も良いことをしてくださいます。

自分は誰かに祈られているのだ、と確信し、それによって励ましを受ける。これも信仰生活の大きな喜びでしょう。

次に、イエス・キリストの霊の助けです。これは端的に、聖霊の助けと言ってもよいところです。聖霊は絶えず主イエス・キリストと共にあります。主の御旨や働きとは別のところで、独立して、御霊が働くというようなことはありません。

この聖霊の助けですが、注意したいのは、何かをするのに自分で半分か、7割、8割くらいはできるけれど、しかしまだまだ自分は力足らずだから、残りのところを御霊に助けていただく、というようなことではないですね。

全面的に、御霊に拠り頼むのです。初めから終わりまで、聖霊の助けが必要です。

イエスさまはあるとき言われました。「天の父は求める者に聖霊を与えてくださる」(ルカによる福音書 11 章 13 節)。

求めるなら、必ず聖霊は与えられる。祈るなら、聖霊の助けは確実にあります。

——こうして、どのような動機にせよ、キリストが宣べ伝えられるならば、それが私の救いとなる。救われた多くの人たちを、霊においてまさに目の当たりにすることができて、私も霊的な励ましを受ける。

そのような私のために、執り成しの祈りがささげられ、御霊が絶えず私を助けていてくださる。

このことを覚えて、パウロはこれからも、喜び続けるのです。

《3》

20 節では、パウロの願うこと、希望していることが告げられています。

それは一言で言えば、キリストがあがめられるように、ということです。

そして、そこにいろいろと修飾する語句が付いていて、一読しただけでは言葉のつながり関係がすっきりと見えない、ということがあるのではないのでしょうか。

まず、「どんなことにも恥をかかず」とあります。言葉のつながりとしては、“私が

どんなことにも恥をかくのではなくて、キリストがあがめられるように”ということ
です。共に未来形で、また受身の言葉で言われています。

ここで明らかですが、恥を受けることが、あがめることの反対語として用いられて
います。一つの考えでは、この後、パウロが裁判にかけられた時に、見苦しいことを
したり、ましてや主イエス・キリストを否んだりしてしまって、恥をかくようなこと
なく、きちんとキリストをあがめることができるように。——そのようなことを述べ
ているのだろう、と言います。

そのような意味もあるでしょう。しかし、もう少し広く考えてもよいのではないか
と思います。たとえ、今後、どのようなことが起こるにせよ、信仰生活において、決
して恥をかかされるようなことはしない。そして、キリストを心から喜んで、あがめ
ていきたい、という願いです。

ペトロの手紙一 4章 16節に、「しかしキリスト者として苦しみを受けるのなら、決
して恥じてはなりません」とあります。

キリスト者が苦しみを受けるのは恥ずべきことでも何でもありません。恥ずべきことは、
苦しみの中で、主イエス・キリストをあがめることをやめてしまうことです。

ですから、たとえどのような状況になろうとも、主イエス・キリストをあがめるこ
とをやめてはならない。あがめることをやめて恥を受けるのではなく、主イエス・キ
リストがあがめられることこそ、私の願いである。

「あがめる」と訳されているこのギリシア語には、もともと、大きくする、長くす
る、といった意味があり、そこから、誉め称える、讃美する、あがめる、といったよ
うな意味を生じています。ですから、あがめると訳しても、そこには大きなものとし
る、という意味が当然に含まれています。

キリストが大きなものとされるように。事実、大きな御方であるわけですから、そ
の事実どおりに、私たちは主を大いなる御方としなければならない。これ以上の大い
なる存在は他に何もありません。主こそ最大の御方です。

「公然と」あがめられるように。これは言うまでもないことでしょう。仲間内だけ
で、陰でこそ隠れるようにして、あがめることなどできませんから、公然となさ
れるべきです。

ただし、「公然と」というギリシア語には、もう少し違った意味もあります。「勇気、
大胆さ」といった意味です。それで、「大胆に、キリストがあがめられるように」とい
うことになります。

恐れることなく、大胆に、力強く主をあがめることによって、主は公然とあがめら
れることになります。

次に、「これまでのように、今も」とあります。これは、「キリストが公然とあがめ
られるように」という言葉に懸かっているでしょう。これまでのように、今も、キリ
ストがあがめられるように。

なお、細かなことかもしれませんが、「これまでのように」と訳されている言葉は、
「常に、いつでも」といった意味の言葉です。

「これまでのように」というのでは、未来が抜け落ちていきます。しかし、原文は未

来をも含めて、常に、そして今も、キリストがあがめられるように、と告げています。

そして、キリストが公然とあがめられることは、それが「私の身によって」（私の身において）起こることだ、とあります。

私の「身」というのは、体のことです。ただし、体そのものに限られたことではなく、パウロという存在そのもののことを意味していると考えてよいでしょう。

パウロが語ること、行うこと、それらすべてを含めてです。パウロという一人の信仰者において、キリストがあがめられるように、というのです。

これによって、明らかですが、パウロはいわば神さまがあがめられるために用いられる道具、器です。そういうものに過ぎない。器は、自分では何もできません。自分の意志ではなく、使う人の意志によって、それぞれの働きをします。

私たちは、神さまの栄光を現す、ということをよく言います。ウェストミンスター大・小教理問答の問1で、人のおもな目的は神の栄光をあらわし、永遠に神を喜ぶことだ、と言われているとおり、こういう言い方自体、まちがいで何もありません。

ただし気をつけなければならないのは、「栄光を現す」ということが、まるで人間が、人間としての力や思いを傾けて努力することによって、そのことを達成できるというようなことではない、ということです。

神さまが私たちを用いてくださって、私たちを通して、御栄光を現される、そのようにして、あがめられるのです。

神さまのご栄光を現す、というのは、人が主体的に、能動的に、そのことができるかのような言い方になっていますが、それは現象面を見てのことであり、本質は、神さまが働かれるということです。その御業に、私たちもあずかる。主に用いられる。

「栄光を現す」とは、どういうことかと、しばしば考えることもあるかもしれませんが。これは、まことの神である御方を、その通りに、神とする。神としてあがめ、讚美することです。

それはもう少し具体的に言えば、礼拝であり、祈り、伝道、教会政治であるでしょう。そのほか、キリスト者が神さまのために行う、あらゆることがそうです。

そういったことを通して、神さまがまことの神さまとしてあがめられるように。大いなる御方として讚美されるように。

自分の身において、そのように主イエス・キリストがあがめられるようにと、パウロは願うのですが、それは決して自分にそのことをする力がある、というわけではありません。

父なる神さまと、主イエス・キリストにすべてを委ねて、器として用いられることです。それが、キリストが真実にあがめられることへとつながっています。

そして、「私の身において」ということですが、それは私が生きるにも死ぬにも、主があがめられるように、ということですね。

生きていれば、なおもパウロの働きを通して、主イエス・キリストがあがめられることになるでしょう。

死ぬにも、とあるのですが、これは恐らく殉教のことを念頭に置いているのでしょ

う。殉教によっても、主があがめられることは間違いありません。なぜなら彼は福音を宣べ伝え、神さまの恵みを証したために、殺されることになったからです。

この、生きること、死ぬことについては、次回でも引き続き論じられています。

とにかく、何がどうあろうとも、キリストが告げ知らされるように。私はそれを喜ぶ。それこそ私の救いとなるからだ。

そのように、キリストに徹しています。キリストと共にあること、キリストの恵みによって生かされること、主にあってだけ確かな希望があること。

このようなパウロです。キリストと共にあって、絶えずキリストに従い行く私を通して、キリストがあがめられるようにと、彼は願っています。

それはまた、私たちの願いともなるべきことでしょう。

キリストに徹して生きる。自分ではなく、キリストが大いなる御方として誉め称えられることを願う。喜びをもって信仰に生きるというのは、こういうことでしょう。

2021年10月3日 朝拝

恵み深い天の父なる神さま、尊い御名を崇めます。

あなたの恵みは溢れています。福音が人々に、神さまに拠り頼み、神さまと共に歩む幸いを告げ知らせています。

どうか主イエス・キリストが、どのような時においても、またどのような動機からでも、これからも力強く告げ知らされますように。

そして、あなたを信じて、救われる魂が、さらに神の御国へと増し加えられていきますように。

そして、多くの兄弟姉妹が主イエス・キリストをあがめる器として、尊く、また力強く用いられて、共に、心から、あなたを喜ぶ者とされますように。

御手に委ね、感謝して、主イエス・キリストの御名によって祈ります。

大場康司